

ソウルと祖父の思い出

高橋 葉月（広尾学園中学校）

人々は私を日本人だと言う。私の顔立ちも名前も日本人のものであるからだろう。でも私はアメリカで生まれ育ったので自分はアメリカ人だと思ってきた。しかし、私はもう一つの国と深く繋がっている。それは母の国、韓国である。

母の家族を訪ねてソウルに行くことが多い。韓国への旅行はいつも楽しみである。なぜならば韓国の人はとても親切で文化もアメリカと日本とは異なるのでそれを体験できるからである。しかし、私が韓国旅行を楽しみにしている理由はもう一つある。それは母のお父さん、私の祖父に会うことである。

祖父は毎日歩く。雨や雪が降っても暑くても寒くても歩くことを休まない。私は一緒に歩きながら祖父の話をお聴くのがとても楽しい。祖父は小さい時に母と弟を亡くし、20歳の時に父まで亡くした。祖父は祖母と結婚するまでの長い間、家族がなく、一人暮らしの寂しい生活をした。しかし、寂しいとも思わないで厳しい運命を乗り越えられたのは、どんな場合でも諦めなかったからだそう。絶望しないでいつもやり直して目標に向かって頑張った。祖父は若い時日本に留学し15年間働いたので韓国と日本の文化の両方を知っている人だ。祖父は本が大好きで数千冊の本を読んだ。歴史、政治経済、哲学、科学等あらゆるジャンルの本を読んだので祖父は広く、深い知識と知恵の倉庫である。私に有益な教訓とアドバイスを与えてくれる。

特に心に残る話は、世の中にはあらゆる人がいて、良い人も悪い人もいるということだ。しかし、悪いことがあっても文句ばかり言ったり、落ち込むばかりではなく、大胆に飲み込んで前に進むことが大事だと言った。人生の中では悪い、悔しい環境にも置かれることはよくあるので、いつまでもくよくよしないで、忘れて前向きに生きることが大事だと言った。例え、人に悪くされても仕返しをして相手を傷つけてはいけない。人間は元々悪く生まれていないので悪くする人にはその人の事情と理由があるはずだ。だから争うよりはむしろ助けるように考えた方がよい。私たちは皆お互い愛し合うべきだ。

私はその祖父をととても愛している。祖父は私にこの世と人生がどれほど美しいものであるかを教えてくれた。しかし、今祖父は90歳を超えている。先月祖父に会った時、祖父の現実の歳に気づいた。祖父がいなくなってしまうことを想像するだけで、胸が痛くなる。祖父と一緒に散歩道を歩けない。知恵の溢れる話をもう聞けない。絶えない笑いも冗談も聞けない。祖父に会う楽しみが無くなると思うだけで悲しみと寂しさで一杯になる。このような心の辛さは今まで感じたことがない。私がまだ知らない人生の美しさについてもっともっと聞きたい。しかし、この心の痛さから、命と死を考えることになった同時に、私がどれほど祖父を愛しているかが分かった。

韓国を訪ねると私はいつも沢山のことを学んで来る。それは韓国について学ぶだけではなく私自身についてもっと分かるのだ。

韓国の建築に学ぶ旅 —DDPと南山韓屋村を訪ねて—

宮崎 寛（広島県）

韓国旅行というと、韓流スターやドラマのロケ地巡り、あるいはコスメや焼肉グルメを思い浮かべがちだが、昨年秋、たまたま手にしたガイドブックがきっかけで、ふと思立って二つの建築物を巡る旅へと出掛けた。

ひとつ目の訪問地は、世界的な建築家ザハ・ハディット女史が手掛けた東大門デザインプラザ（略称DDP）である。それは、まるで天空から宇宙船が不時着したような外観で、大きな曲線で構成された近未来的なデザインの威容に、私はすっかり度肝を抜かれてしまった。残念ながら2020年東京オリンピックの新国立競技場では実現できなかった、『アンビルド（構想だけで実際に建てることのできない）の女王』と呼ばれた彼女の作品が、韓国では「東大門歴史文化公園」の中核的施設として市民に受け入れられていたのであった。我が国では、DDPのような独創的な建築に対して、ともすれば技術的な裏付けや膨大な費用負担、周囲の景観との調和などネガティブな理由を挙げて拒絶しがちなのだが、韓国では果敢に挑戦し、一步先んじていたのだ。「夢見て、創って、満喫する」というコンセプトにより、DDP内部はミュージアムをはじめマーケットが軒を連ね、新しい文化トレンドの発信基地となっていたが、建物それ自体がランドマークとして輝きを放っていた。

この湧き上がるエネルギーはどこから来るのだろうか？そんな思いを胸に抱きながら、次に訪問したのが南山韓屋村である。そこはソウルの庶民から高官までの歴史的な建築群を移築復元したものであり、当時の人々の暮らしぶりが異国から来た私にも手に取るように理解できた。しかし、何よりも意外だったのが、私たち観光客に混じり、ソウル市内の幾つもの幼稚園児たちが先生に連れられ、それらの古い建物を見学していたことである。

その園児たちの数と言ったら、数百人はいただろうか。まだ幼い子供たちには、おそらく伝統文化の奥深さなど知る由もないだろう。しかし、仲間たちとの記念写真や思い出と共に、やがて成長するにつれ、自分たちの国の歴史や伝統に誇りを持つことになるのではなかろうか。そんな教育の機会を韓国の人々は意識的に作っているように私には思えた。過去の遺産を尊重し、それを未来へと結びつけていくのが、現代に生きる者の務めだという使命感が、訪れた二つの建築物DDPと南山韓屋村に感じられた。そして、日本に帰ったら、私の身の回りにある建築や歴史を今一度学び直そうと思った今回の韓国の旅だった。

思い起こせば韓国と日本、その長い両国の交流の歴史の中で、この秋、その友好の絆とも呼べる「朝鮮通信使」が世界記憶遺産に登録されようとしている。隣同士であるが故に摩擦を生じることもあろうが、互いにその長所を謙虚に学び、過ちを乗り越えて新しい未来を共に築いていくことが求められている。

一歩

磯上 潤奈（埼玉県立浦和第一女子高等学校）

「絶対に大学合格して日本に行くから。それまで待ってね。」今夏、私達は固い約束を交わした。「絶対に受かるから大丈夫。待っているから」彼女を信じて私はそう言った。出会ってから五日目。でも、二人で築き上げた友情には何年もの時が流れているようだった。ただの隣国「韓国」から大切な友がいる大好きな国『韓国』へと変わった旅だった。

日韓高校生交流キャンプで韓国平昌を訪れ、私と彼女は同じチームになった。私達は寝食を共にし「平昌、東京両五輪で日韓が相互協力できる五輪ビジネス案を企画し、発表する」というミッションをやり遂げた。日韓両国の学生の意見は食い違い、事業案をまとめるには膨大な時間がかかった。発表準備を徹夜で仕上げ肉体的にも精神的にもきつい私を、彼女は励ましてくれた。私達はスピーチを一緒に行った。緊張してガタガタの私を見てこう言った。「大丈夫だよ」と。その一言に救われ、緊張が解けた。

彼女とは連日深夜、お互いの国の歴史や地理、自分のこと、将来の夢を語り合った。彼女は日本の大学を志望して、叶えるために膨大な努力を重ねていた。その姿に私は大きく刺激を受けた。「頑張ろう」そう思い、帰国後様々なことを始めた。私には印象深い出来事がある。それは歴史について二人で語り合っていた時のこと。最初は表面的なことしか話さなかった。まだまだ大きな隔たりがある歴史的認識によってせっかくできた友情を壊したくなかった。だが、彼女がそれを打ち破って話し始めた。恐怖と興味が頭の中をぐるぐる回っていた。だが、私も腹をくくった。そこから私達は深く広く話し始めた。それまで知らなかった韓国という扉を開けたようで面白く有意義な時間だった。それは私達の友情をより深いものへと変えてくれた。深夜に語り合ったことは私の宝物だ。「互いに真正面から本気で意見をぶつけ合い、尊重し合って分かり合うことが大切だ」と知った。本気で意見をぶつけ合うことは、最初大きな勇気があることだ。しかし、避けていても意味がない。口に出してお互いの思いをぶつけ合うことで互いの溝は埋められるのだ。

彼女が大学に合格すれば来春日本に来る。その際、彼女は私の家に遊びに来るだろう。沢山の日本食と思い出話でもてなそうと思っている。また、私も再び韓国に遊びに行く予定だ。私は今、韓国についてより深く調べている。このような交流を深めて、お互いの国を知り、それを皆に伝えることでいつの日か日韓両国はただの隣国ではなく、深い友好関係で結ばれた国になれるだろう。この夏生まれた新たな友情。言葉の違いなんて、一緒に過ごせた時間の長さなんて関係ない。互いの想いが友情を紡ぐのだ。ただ、観光地を巡るのではない、かけがえのない友情を作り上げる旅も素敵だと思った2017年夏。

京畿道で出会った夢教育

大西 義浩（大阪府）

2015 年夏。韓国の京畿道に行った。

京畿道では、まず教育庁を訪問した。そこで、行政の方から革新教育として人性教育に力を入れていることについての話を聞かせていただいた。

自動車科、自動車 IT 科、自動車デザイン科の 3 つの学科を持つ京畿道自動車科学高等学校を訪問した。ここでは、技術教育の現場から革新教育の取組について学んだ。日本語で自分の夢を語る高校生に、人性教育の成果の一端を感じた。自動車の整備をしている授業を見学した。見学しながら、その学校の先生に、就職した卒業生の離職率について質問した。「途中で兵役などに行くが、終了後もほとんどが元の会社に戻り、離職率は低い。」と返答された。私が以前、勤めていた工業高校の卒業生の早期離職の状況から考えると、高校生の時から自分の将来をきちんと決め、最初に務めた会社で働き続けていることがうらやましい限りだった。

学校見学を終えた後、案内してくれた生徒、先生方と話す機会があった。将来の進路について目を輝かせて話していた。日本に興味ある生徒も多く、「日本に行きたい、日本の会社に就職したい。」と言うだけでなく、「日本の会社に就職するにはどうすればいいですか？」と質問してきた。さらに、校長も「日本の学校に生徒を連れて研修に行くにはどうすればいいか？」と質問してきた。これだけ日本との交流を望んでいることに感動した。日本から自動車に関する技術を学ぼうという姿勢もひしひしと伝わった。進路に悩む高校生と、そこに寄り添う教員の姿が非常に印象に残った。自分の将来の夢をしっかりと語っている生徒のきらきら眼差しは、少し忘れていたものを思い出させてくれた。この学校は、教育庁が目指している人性教育がしっかり根付いていた。自動車に関わるという目的を持っているので、当たり前かもしれない。しかし、自分の意見をしっかりと前向きに生きている姿をしっかりと心に焼き付け、日本の生徒にも伝えていきたいと強く思った。

これからの日本の学校で教育していくことは、いろいろな課題があり、平坦なことばかりでないことはわかっている。けれども、日本の隣国の韓国で、夢を持ち、自分の将来にむかってきらきらと輝いて突き進んでいる高校生がいるということ、そういう高校生に出会えたことを誇りに思いながら、いろいろな壁を乗り越え、日本の学校の生徒にも夢を持って前向きに生きていこうと育てていきたい。

ご縁を繋ぐ智異山登山旅

安井 美和（埼玉県）

私は山が好きで韓国旅行の時も観光の他に山登りやハイキングを盛り込みます。一人旅が多いですが、韓国の山は登山道が整備されていて気軽に行ける低山も多いので、一人登山も快適です。

2016年11月、前から行きたかった智異山登山！標高もあり、登山道も少しきつそうだったので一人では不安で、同じく韓国と山が好きな気の合う友人と一緒に行くことにし、半年以上前から予定を立て準備を整えました。友人は佐賀県、私は埼玉県から、それぞれ釜山・金海空港へ飛び、バスで智異山の麓、中山里まで行き、翌日朝から頂上・天王峰まで登って下りる計画です。女性二人なので、無理せず、途中で諦めることも想定していました。

旅の少し前の2016年8月、韓国からの研修旅行の皆様とご一緒する機会がありました。その中に山好きで智異山登山経験者のチェ氏がいました。智異山登山コースの相談に乗ってもらったり、山の話で交流を深めました。そしていよいよ11月、智異山登山旅行を数日後に控えたある日、チェ氏から連絡がありました。自分の登山仲間のチョン氏が金海空港近くの昌原に住んでいるので、空港へ迎えに行き中山里まで車で送ってくださるというのです。日本から韓国の山に登りに来てくれるならと喜んで出向くとの嬉しい申し出。お言葉に甘え、当日空港にて初対面を果たしました。最初は少しぎこちないながらも、目的地の宿まで話をしながらドライブを楽しみました。宿に着いた頃には真っ暗で、そのままトンボ帰りさせてしまうのは心苦しかったですが、翌早朝から登山なのでお礼を言って別れました。

そんな中、チェ氏からは、ソウルから深夜バスで来て一緒に登ってくれるという連絡が入りました。またまた何と嬉しいお申し出！心強い助っ人に私達は大喜び。翌朝朝6時から、快晴の中、三人での智異山登山が始まりました。少し残った紅葉を楽しみながら、平日なので凄く混むこともなく天王峰登頂成功！遠く老姑壇まで見渡せる絶景に感激しました。ここから、二人だけなら行かない予定だった遠回りの下山コースを下ります。下っていると、あれっ？前からチョン氏が向かってくるではありませんか？！実はチェ氏とチョン氏は通話はよくするものの長い間会っていなかったとのこと。チェ氏との再会と私達の登頂祝いに駆け付けたというのです。私達はただご面倒を掛けただけではなく、お二人の再会のキューピットとなれたのでした。下山後は四人でサムギョプサルで栄養補給。楽しい時間を過ごし別れました。

この時のご縁はその後も続いており、ソウルや釜山で会ったり、一緒に山に登ったりしています。私と友人との縁も最初は全く知らない間柄から韓国と山を通じて繋がったご縁でした。韓国と山を通じて繋がっていくご縁をこれからも大事にして韓国旅行と登山を楽しんでいきたいと思えます。

五感が喜ぶユニークなハイキング体験

白木 洋子（秋田県）

私はこれまで 30 ヶ国以上の国を旅行したが、鶏足山（ケジョクサン）のようなユニークな場所を見たことがない。韓国人の友人から「裸足でハイキングができる場所がある」と聞いて、どんな山だろうと好奇心に駆られて行ってみることにした。大田市の郊外にある鶏足山は自動車が無いとアクセスが難しいため、大田駅からバスツアーに参加した。ガイドは語り上手だったらしく、バスの車中は大いに盛り上がった。「もっと韓国語が理解できれば」とは思ったが、雰囲気だけでも十分に楽しめた。

大田駅出発から 1 時間ほどで鶏足山に到着すると、私はさっそく靴を脱いでみた。ひんやりとした黄土の感触は、想像をはるかに超える気持ち良さだった。黄土道（ファントキル）という約 1.5 km のコースには柔らかい黄土が敷かれているので、足を痛めることなく裸足で歩くことができる。年に数回、黄土道に花を敷く日もあるそうだが、裸足で花の上を歩くのはどんな気分だろう。

湧水の清流が流れる美しい森を散策していると、どこからか音楽が聞こえてきた。歌声に誘われて近づくと、森の中に設けられたステージではコンサートが開かれていた。裸足で山を歩いた後に森の中でオペラを聴くというシチュエーションに、まるで夢でも見ているような気分になった。途中で男性歌手が近づいてきて、ロマンチックな歌を歌いながら私の手を力強く握られた時は、もう夢なのか現実なのか分からなくなってしまった。演奏のクオリティが高いだけでなく、本格的なオペラから歌謡曲まで幅広いレパートリーで、様々な年齢の方々が目を輝かせて聴き入っていた。歌手が盛り上げ上手だったのに加えて聴衆もノリが良く、会場全体が一つになったとても楽しいコンサートだった。

さて、たくさん歩いた後はお腹が空いたので、公園の出口で売られていたチャメ（マクワウリ）を食べながら帰りのバスを待った。私は韓国で初めてこの果物を食べたが、あっさりした甘さが気に入った。

こうして素晴らしい一日を過ごした私は、身も心もすっかり癒された。土の感触を素足で楽しみ、美しい森を目で楽しみ、新緑の香りを鼻で楽しみ、音楽を耳で楽しみ、旬の果物を舌で味わうことができた。鶏足山はまさに五感の全てが満足できる楽園であった。一度行けば必ずまた行きたくなる場所なので、日本人にはもちろん韓国の方にも是非お勧めしたい。

44 年振りの安東

長野 清志（神奈川県）

学生時代の 1972 年、初めて韓国を二週間旅行した。日韓条約が結ばれてまだ 7 年、日本からの旅行者も韓国の情報も極めて少ない頃であった。「対日感情が悪いから気を付けて」と何人もの人たちから言われ、不安な気持ちを抱えながら一人関釜フェリーに乗り込んだ。しかし、想像とはまったく異なり、韓国の方々はとても優しくかった。多くの親切に接したが、その中でも安東を訪れた際の体験が、その後の私の韓国との深い関わりの決定的な契機となった。

列車でソウルに向かう途中、暗くなってきたので、今日はここで降りてみようかと下車したのが、両班の里（当時はそんな予備知識もなかったが）として知られる安東だった。駅の側の交番で、今晚の宿を紹介して欲しいと頼んだ。ここで待つようにと言ったお巡りさんは、暫くして、中年の女性と共に戻ってきた。その女性は、「何十年ぶりかで日本語を話すわ。さあ、ついて来て」と、とても流暢な日本語で言った。彼女は旅館を経営しており、そこで 3 泊したが、食事は全て彼女の家族と共で、昼間は安東の街を案内してくれた。2 人の小さな娘さんとも、言葉は通じなかったが、一緒に遊びながら仲良くなった。

ソウルに発つ日、彼女の家族全員が駅まで見送りに来てくれた。私が、さようならと手を振ると、2 人の小さな娘さんが大きな声で何か叫んで泣き始めた。きっと、「オッパ、カジマセヨ！（お兄ちゃん、行かないで下さい！）」とでも言ってくれたのかと今となっては思うが、その涙を見て、私の胸は一杯になった。初めて会った私に、しかも日本人の私に、こんなにも親切に、家族の一員のように接してくれるとは……。その時に私も、「よし、私がこれから出会う韓国人の人たち皆に同じように親切に接しよう！」と決心した。

その後、NGO の仕事での日韓交流活動や、韓国人の友人たちの結婚式への参加（一度は主礼も務めさせてもらった）など、公私に亘り 30 回ほど韓国を訪れ、多くの韓国人の友人も得ることが出来たが、その原点こそが、正にこの安東での体験である。再訪を望みながらも、その後、機会が得られず、退職した昨年、漸く 44 年ぶりに願いを叶えることができた。

残念ながら最早その家族の消息は知れず、訪ねる手がかりもなかったが、安東に戻ってこられたという喜びに胸は躍った。安東を発つ前夕、ソウルの友人たちへのお土産を買おうと、駅の側の伝統菓子で知られるお店に立ち寄った。店の女主人に、安東でのこの忘れ難い思い出を何気なく話した。すると、もっと詳しく聞きたいからと、彼女は私を店内の客席に座らせ、お茶やお菓子を振る舞いながら、居合わせた顧客の人と共に私の話に熱心に耳を傾けてくれた。安東の人たちが、私のこの体験に関心を寄せ、暖かくもてなしてくれたことは、新たな良き思い出となり、私の安東と韓国人の人々への感謝と愛情は益々深まったのだった。